



ロンドンで哲学を学ぶ！

海城中学高等学校グローバル教育部

ロンドンで哲学を学ぶ 出納 楽

皆さん、こんにちは。初めてお目にかかります。海城中・高等学校卒業生の出納楽と申します。私は、2012年に海城高校を卒業後、同年9月から約1年間、英国はユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン（ロンドン大学）（以下UCL）の大学進学準備課程に在籍し、同課程を修了した現在は、キングス・カレッジ・ロンドン（ロンドン大学）の哲学部で学んでいます。この度は、「海城から海外の大学を目指すこと」について、皆さんと是非情報を共有したいと考え、この「グローバル通信」に寄稿させていただき運びとなりました。

本稿の主な目的は、「海城で真剣に学校生活に取り組み、海外の難関大学に進学することは全く難しいことではない」という事実を、在校生の皆さん及びその保護者の方々に理解していただくことです。そこで、まず「海外の大学への進学を志した動機」について、次に「進路決定から合格までのプロセス」について、そして最後に「海外の大学での生活」について、順に私の経験を振り返る形で簡略にお示し致します。その結果、「日本国内の難関大学を目指すのと同じ次いで海外の難関大学への進学を捉え直すことで、海城生の選択肢は広がり、将来の可能性も大きく開ける」という本稿の主張を皆さんに汲み取っていただければ幸いです。

私が海外の大学への進学を志した直接のきっかけは、高校2年生の時に参加した「イギリス海外研修」でした。同研修を通じて、「英国の大学に進学したい」という考えが確立された背景には、ポジティブな理由とネガティブな理由の双方があったと認識しています。

まず、ポジティブな理由として、『英語「を」勉強する』のではなく、『英語「で」勉強する』という体験をしたことで、英語という言語を単なる学習対象としてではなく、将来より多くの人々の前で自分を表現するためのツールとしての重要性を理解できたこと」が挙げられます。これによって、これまでの「日本語で英語を理解する」という姿勢から、「根本的な思考自体を英語で行えるようにする」という姿勢に、ドラスティックに転換する必要があることを自覚することができました。第二に、「多様性が創り出す可能性に心を動かされたこと」です。同研修中ロンドンに旅行する機会があったのですが、それまでほとんど海外に行ったことの無かった私は、異なる人種・宗教・価値観等が絶え間なくぶつかり合う環境とそのエネルギーに圧倒されました。「グローバル化」は決して今に始まったことではありませんが、これから一層人々のモビリティが高まり、多様なバックグラウンドを持った人間たちが世界中を行きかう中で、「日本的な」同質性を背景にしたコミュニケーションはますます通用しなくなるでしょう。むしろ、多様性の尊重に支えられた異質な者同士の切磋琢磨・協働によって、今まで起こりえなかった視点や価値を創造することに強く惹かれたことを、今でもはっきりと覚えています。

次に、ネガティブな理由として挙げられるのは、「ただ『既定路線』に乗せられただけの自分の将来について、批判的に考えることを怠っていたのに気が付き、日本国内の陳腐なエリート・ゲームにとどまることに嫌気が差してしまったこと」です。同研修も終盤に差し掛かった頃、様々な貴重な体験によって、日本の難関大学を目指す意義に疑問を持ち始めていた私は、当時UCL

法学部の学生でもあった担当教員に、「日本の難関大学を出た後に英国の大学に進学した場合、現地の人間は我々をどのように評価するのか」と聞いてみました。彼女は、「日本ではとりあえず頑張っていたのね、という程度でしか扱われない。例え日本の『権威ある』大学を卒業していたとしても、それを振りかざすことで何とかなることなんて、たかが知れている」と答えました。当時一生懸命に受験勉強を積み重ねていた私にとって、その言葉はかなりショッキングなものでしたが、国内の難関大学への合格という「根拠のない名誉」の為だけに勉学に突き動かされ、心身ともに疲労してしまうことへの違和感が晴れたのも確かでした。

つまり、海外の大学への進学を志望するに至った主な動機は、「多様性とその尊重を前提として、全く異質な人間同士が積極的に協働し合うことで生まれる創造性に魅せられたため」、また「そのような環境で中心的な役割を果たすためには、英語をあくまでも道具として使いこなせるようになる必要性を自覚したため」でした。そして残念ながら、日本国内の大学にはそういった私の希望する最善の環境が整っていない場合が多かったため、非常に自然な形で海外の大学に進学することを目指し始めました。

海外の大学へ出願し、合格することは、一見ハードルが高いようにも思われますが、特に英国の大学へ進学を目指す場合は、少なくとも私にとって、決して難しいものではありませんでした。

それでは以下に、実際私がどのようにして合格までたどり着いたのかを、大まかではありますが、順を追って記したいと思います。

まずやはり重要なのが、海外の高等教育機関で公式に認められている英語運用能力証明試験で、出願に必要な成績を取得することです。私の場合は、主に英国・オーストラリア・ニュージーランド等で有力な、アイエルツという試験を受験しました。同試験は、リスニング・リーディング・ライティング・スピーキングの4セクションから構成されていて、成績は0から9までのバンドスコアと呼ばれる指標で段階的に評価されます。私は、高校2年生の冬から同試験の対策を始めましたが、初回の試験で出願に要求されている水準を既にほぼ満たすことができ、それ以降は苦手分野の克服と、得意分野の実力伸長を期して勉強に取り組み、高校3年生の夏には、要求水準を超える成績を獲得できました。ここで私が強調したいのは、あくまで私は「普通の」海城生で、特別勉強のできる生徒ではなかったという点です。私の基本的な勉強の仕方は、まずは先生が展開される授業をしっかり受け、定期的に課される課題等を丁寧にこなしていくという、非常にシンプルなものでした。従って、同試験で十分に力が発揮できたのは、海城の教育で身に着けた基礎学力や教養があったためだと考えています。

次に、出願する際に提出する書類の中で最も重要となる、パーソナル・ステートメントの作成にも非常に力を入れました。パーソナル・ステートメントとは、簡単に言えば、志望動機や自己アピール等をまとめたものです。例えば、なぜその大学に入学したいのか、自分にはどのような強みがあるのかなどを、実際の学校生活で培った経験等を参照しながら、論理的に表現します。私の場合、UCLにかなり強い思い入れがありましたので、自分の書きたいことを全て書き出したうえで、重要度順に優先順位をつけて、実際に書くことを絞り込んでいくという作業にかなりの時間を費やしました。また、私は中学生時代に中学生徒会長として、高校生時代には高校生徒会副会長として生徒会活動に取り組んでいたこともあり、その活動実績や、実際に活動を牽引し



ていくリーダーシップ及びチーム・ワークの力を最大化する能力等を自己アピールに盛り込みました。ここで重要なのは、海外の大学における入学選考過程では、単なる学力だけでなく、むしろ受験生という人間そのものを評価した上で、合否を決めるという傾向が非常に強いという事実です。学校での学業成績はあくまでも一定の知能があるということ判断するための「ふるい」のようなものであり、決して選考の中心的な評価基準にはなりません。より重要なのは、他の受験生にはない特異な経験や卓越した個人の能力、また人格といった、学力以外の部分なのです。

換言すれば、海城で学びながら英国の大学に出願し、合格を勝ち取るということは、何か特別なものや新しい勉強を要求するものではありません。そしてそれは、あくまでも海城での勉強で培った基礎学力と教養を基盤にして、海外における同様の試験を通じた学習で英語運用能力をさらに高め、またパーソナル・ステートメント等の出願書類の作成を通して自分の中高時代を批判的に見つめることで、将来の進路を検討するにあたり最善の判断を自らが主体的に下すということに他なりません。

海外での学生生活は、私が渡航前に日本で想像していた通り、またさらにその想像以上に、刺激的で有意義なものです。それでは以下に、私が直接肌で感じた海外の大学へ進学することのメリットについて記したいと思います。

まず、海外の大学に進学することで得られる最大のアドヴァンテージの一つは、世界規模の広く深い人間が構築できることでしょう。とりわけ英国には、先進国のみならず発展途上の国々を含め、世界中から数多くの多様な学生が集まりますので、自分でも驚くほどグローバルな人脈を確立することが出来ます。加えて、海外の大学に進学してくる学生たちは、やはり何らかの形で自国の教育制度やその実情に不満を感じている場合が多く、また彼ら自身も大きな決断をして学びに来ているため、学問に取り組む情熱やモチベーション非常に高いことから、高水準の学習環境を共に作り上げていくことができるという醍醐味もあります。第二に、私生活の面に目を向ければ、そういった十人十色の素晴らしい仲間達とかけがえのない時間を過ごすことが出来るのも、一生の財産となるでしょう。例えば、平日大学の授業がある際には、各々が自らの生活に責任を持ち、自炊等をして暮らす一方、週末や休暇になれば、ロンドンというヨーロッパのハブ都市であることを生かして近隣のヨーロッパ諸国に気軽に旅行したり、また英国国内のナイト・ライフや各地への遠出を楽しんだり、学生のうちにしか出来ないアクティブで内容の濃い生活を送れます。

つまり、海外の大学での学生生活では、日本にとどまっていたは決して体感することの出来ない、多様な人々との関わりが生み出す濃密な体験が可能になります。このアドヴァンテージは、大学での授業を始めとしたアカデミックな場面はもとより、私生活を通じた個人的なレベルでも享受することが出来るため、たった四年間という短い時間でも、驚くほどの成長曲線を描いて自分が大きくなっていることに気がつけるのではないかと思います。

ここまで、海外の大学への進学を目指した動機から、現地での実生活とそのメリットまでを簡単に振り返ってきました。再度私が強調したいのは、「海城で真剣に学校生活に取り組めば、海外の難関大学に進学することは全く難しいことではない」という事実と、「日本国内の難関大学を目指すのと同じ次元で海外の難関大学への進学を捉え直すことで、海城生の選択肢は広がり、将来の可能性も大きく開ける」という展望です。私はあくまでも「普通の」海城生として、勉学や課外活動に一心に打ち込み、またそれを目一杯楽しんで中高時代を過ごしました。特に現在在校生

の皆さんには、是非できるだけ早いうちに、自分の将来の進路やその先の道程について真剣に考えていただく機会を持っていただくことを切に希望致します。自らの将来を建設的及び批判的に考えることを怠らなければ、様々な選択肢が皆さんの前に現れ、また進むべき道も自ずと開けてくることでしょう。

最後になりましたが、本稿では、出来る限り簡潔に「海城から海外の大学を目指すこと」について私の経験を元にその大まかな見取り図をお示ししようと心がけましたが、分かりにくい箇所や不明瞭な部分も多々あったことかと思えます。また紙面の都合上、実際には皆さんにお示ししたくても詳しく触れることができなかった情報も沢山ありました。上記二点については、筆者の未熟さ故のことであると考えていますので、何卒ご容赦をお願い致します。

それでは、本稿が在校生の皆さん及びその保護者の方々に少しでも有意義なものとなりましたことを願い、結びにかえさせていただきます。

お知らせ

上記の記事をお読みになり、海外の大学への進学について少しでも興味を持たれた在校生の皆さん、またそれに関心のある保護者の方々等がいらっしゃいましたら、是非一度グローバル教育部をお訪ねください。

加えて、私は現在大学の夏期長期休暇に伴い一時帰国中ですので、私へ直接ご相談等を希望される方がいらっしゃいましたら、同部の担当の先生にご一報いただければ、私のメール・アドレスを教えてもらえますので、お気軽にご連絡ください。私の出来る限りの範囲で、喜んでお力添え致します。

なお、7月中旬現在、海外の大学への進学をテーマにした講演会を9月の始めに開催する予定ですので、ご興味をお持ちの方は是非お越し下さい。

グローバル教育部より

出納君が日本にいる間に「出納君を囲む会」を開く予定です。留学に限らず、出納君の様々な経験談を聞くことができたらと思います。生徒諸君は勿論のこと、保護者の方々も是非ご参加下さい。

なお、参加を希望される場合は、A4程度の大きさの紙に〈組・番号・氏名(保護者の方の場合は、ご子息の氏名と並記して下さい)・質問事項〉を記し、9月2日までにグローバル教育部にご提出下さい。

出納君を囲む会

日時 9月6日(土) 午後1時より2時間程度
場所 当日、校門付近に掲示

※「グローバル通信」も、1学期途中からの発行となりましたが、多くの方々にご協力いただき、6号まで発行することができました。来学期も是非お読み下さい。暑い、暑い、夏休み。ご自愛下さい。